

十五歳、私がみんなに伝えたいこと

青垣中学校 三年 塩津 真弥

夏休みが近づいた七月、税務署からゲストティーチャーが来られて、租税教室が行われました。その話の中で私の心に残ったのが、税の使われ方についてでした。税には福祉に関係するものが多く、今私が生活している児童養護施設もその一つです。その時、私は世間での児童養護施設の見方が気になり、帰宅してから調べてみました。すると、よく出てきたのは「かわいそう」という言葉でした。そこで思ったこと……私は「かわいそうな人」なのでしょうか。

私は生まれて十日で乳児院に入りました。乳児院とは、就学前までの乳児を入所対象としています。一方児童養護施設では、三歳から十八歳までの人を入所対象としています。生まれて十日で入ったことを知ったのはつい最近の事です。聞いた人は乳児院のときからお世話になっている人からです。乳児院にいた頃の記憶はありませんが、物心ついた時から一ヵ月に一度、大阪から会いに来てくださいます。一ヵ月に一回でも家族よりも過ごした時間が長く、とても良くしてくださっています。夏には暑中見舞いを、冬には年賀状、そして私の誕生日には手紙とプレゼントを送ってくださいます。乳児院にいた頃の様子をととても笑顔で話してくれる姿を見ていると、私をこんなにも大切にしてくださる方がいることを幸せに感じるときがあります。

また、これまでお世話になった里親さん達からも多くの愛をうけています。私がお世話になっている里親さんは、季節里親といい主に長期休みなどに行くことが多いです。私が里親さん宅に行ったのは、小学一年生の時でした。里親家庭を経験するのが初めてで私がとても緊張していると、気軽に話しかけてくださり、私のペースをととても大切に接してくださいました。今でも、印象に強く残っています。他にも、五つの家庭の方々と出会い、私が少しでも普通の家庭に触れる事ができるよう、様々な工夫をして迎えてくださいました。キリスト教のご家庭や警察官のご家庭、養子縁組をされた子どもさんがいるご家庭など、それぞれの特徴があり、とてもいい体験をすることができました。私は本当の家庭の記憶はありません。それでも、沢山の温かい経験をしました。その愛される経験として一番長く、そして一番近くで、支えてくれている施設の職員の先生方と、共に生活をする子どもたちがいます。私の記憶では、施設の生活しかないぐらい長く生活しています。今の施設が創設された年が平成二十五年なので、そこから計算すると十一年経っています。その十一年の中で出会いもあり、別れもありました。私と同じ年に入り、同い年の子もいます。入った時の記憶もあまり覚えていませんがとても長い年月を過ごしています。当然、子どもと子どもの間や職員と子ど

もの間で合う、合わないはあると思います。ですが、お互いが改善しあってうまく生活していると思います。無くした物があり、声をかけるとみんなで探してくれるし、いろんなジャンルの好きを共有する事もあります。一方で、靴下が混ざってしまい次の日学校に行く時、自分の靴下がなく困る時もあります。そして、他の人の靴下を私も使ってしまうので、負のループが今も続いています。そんなことでも笑い合える仲がとても温かく、好きです。職員の先生は、親しみを込めてニックネームで呼ぶことが多く、子どもと職員の関係がより近い形で、毎日過ごしています。イライラしていて強く当たってしまう時もあります。でも、これが必要だと言ったらすぐに用意してくださるし、学校からの配布物で保護者が書くコメント欄には、次の日にきちんと書いてくださっています。自分が生活できているのは、こういった支えがあるからこそ成り立つもので、それが当たり前になりすぎてあまり感謝を伝えられてないと思うことがあります。日頃から、言えるように心がけたいと思っています。

このように沢山の人から愛されている私は「かわいそう」なのでしょうか。施設で生活していて辛い事がゼロという訳ではありません。それでも私は、力強く生きています。これからも、私たちの事を「かわいそう」だと思っている人に出会うかもしれません。その時、そういった考えを変えられるような人になりたいです。今の自分にできることは、施設での生活について知ってもらうことです。知ってもらうことで、少しでも施設で生活する子どもたちについて、理解してもらいたいです。私はこのまま力強く生きて、今度は支える側になりたいです。